

近世秋田の都市構造とその形成過程に関する研究

A Study on the Structure and Formation Process of Akita City in the Edo Era*

木村 一裕**・清水浩志郎***・三浦 大和****

by Kazuhiro KIMURA**・Koushirou SHIMIZU***・Hirokazu MIURA****

1. はじめに

今日の情報化、国際化、高齢化の進んだ社会において、人々が安全に安心して住むことができるとともに、住むことに誇りと充実感を持つことのできる都市が望まれている。そのような中で歴史的遺産や、歴史的町並みに対する関心の高まりから歴史的なものを保護しようという動きが高まっている。

近年では福岡県柳川市、埼玉県川越市など歴史的町並み保存と「まちづくり」「まちおこし」を連携させ、民と官が協力しながら町の活性化のために活動し注目されている。

このように都市の歴史や風土を考えたまちづくりが全国各地で行われるようになり、都市計画においても歴史的文化遺産がまちづくりの重要な要素となってきた。

秋田市は秋田県の中央に位置する秋田県最大の都市であり、人口約 31 万人を擁する中核都市として、また、環日本海における文化、経済の拠点都市として着実に発展を続けてきた。現在の秋田市のまちづくりの原型がなされたのは、慶長 7 (1602) 年に初代秋田藩主佐竹義宣が常陸国から秋田に国替えとなり、現在の秋田市千秋公園に久保田城を築き入城したときである。平成 16 (2004) 年は秋田駅東口に拠点センターが建設され、秋田中央道路の建設が始まり、秋田市と隣接する河辺町、雄和町が合併するなど新たなまちづくりが行われようとしている。

現在の都市のありようは、これまでの歴史の積み重ねによって形作られたものであり、今後のまちづくりを考える際にも、都市の歴史を理解したうえで、継承し、展開することが重要であると考ええる。そのためには、過去にどのような都市計画、交通計画が行われていたのかを今一度を調査する必要があると考えられる。そこで本研究では現在の秋田市の原型となった近世秋田の都市形成過程を、歴史的な視点から把握することを目的とする。

具体的に述べると、これからのまちづくりにおいては、その地域の歴史、環境、そして生活などの地域性や個性といったものを考慮する必要がある。そのためには、都市がどのように造られ、どのように発展して現在に至るのか、また、そこに住む人々はどのような暮らしをしていたのか、そして都市の発展にどのような影響を与えたかという、まちづくりの歴史を知ることは、これまでのまちづくりを理解し、将来のまちづくりを考えるうえで重要な手がかりとなるものと考えられる。

2. 研究の方法

本研究では秋田市の歴史に関する文献をもとに文献調査を行った。

調査内容は、近世秋田の成り立ちを調査し、城下町の構造と機能、近世秋田の都市の機能と配置、近世秋田の人々のまちづくりへの関与を調査するものである。

具体的には、まず近世秋田の成り立ちを調査するため、もとは常陸を治めていた佐竹氏が秋田へ転入してきた理由の調査と、城下町を築くに至った理由を考察した。次に都市計画的にどのように行われていたかを考察するため、城下町の構造と機能について着目し、城下町を構成している城、侍町、町人町、寺町について調査し、さらにその城下町がどのように形成されていったかについて調査した。また、交通計画的にどのように行われていたかを考察するために近世秋田の都市の機能と配置について調査し、当時の交通手段を陸と海の別々に調査し特徴を調べ、それらに加えて城下町周辺の都市と城下町の関係について調査した。最後にそこに住む人々がまちづくりに与えた影響を考察するために、近世秋田の人々のまちづくりへの関与を調査した。また、近世においては世の中の変化も乏しく、住民は町の運営に関する役割をもって、その役割を繰り返す日常生活を営んでいたため、近世の人々にとって祭りや芝居などの非日常生活は重要であり、そのような非日常生活の文化がまちづくりの形成に影響していたと考えられたため、生活を日常と非日常に分けて考察した。

研究の対象地域は現在の秋田市地域である。近世では秋

*キーワード：土木史、都市計画、近世

**正員、博 (工)、秋田大学土木環境工学科、教授

秋田市手形学園町 1-1、Tel : 018-889-2368

e-mail : kzkimura@ce.akita-u.ac.jp

***フェロー、工博、秋田大学名誉教授

****学生員、工修、秋田大学大学院土木環境工学専攻

田市のことは久保田と呼称されていた。また、本研究で近世と呼んでいるのは佐竹義宣が秋田へ入部した慶長 7 (1602) 年から廃藩置県によって秋田県となった明治 4 (1871) 年までの期間である。

3. 佐竹氏の入部と築城

慶長 7 (1602) 年、初代秋田藩主佐竹義宣が転封されたときに近世の秋田は始まった。このとき佐竹義宣は旧領主の居城に入城したが、城が狭かったなどの理由からその城を破棄し、新たな地に城を造り、軍事的要素に加え都市計画的な観点からも新たなまちづくりを行ったと考えられる。以下に詳細を記述する。

図-1 に久保田城下町周辺の概略図を示す。

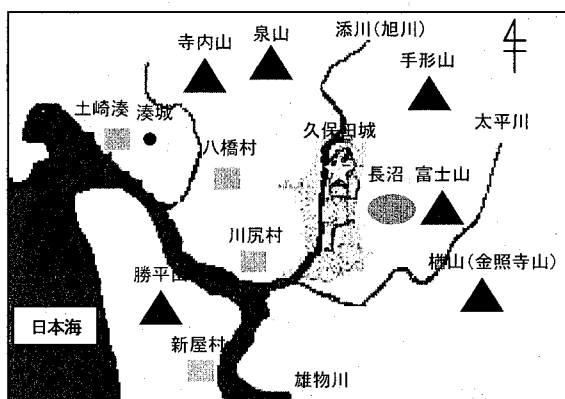


図-1 久保田城下町周辺概略図

常陸国を 470 年間にわたり治めてきた佐竹氏は、慶長 5 (1600) 年の関ヶ原の戦いの後、慶長 7 (1602) 年に秋田に転封された。藩主の佐竹義宣は、当初旧領主である安東氏の居城の湊城に入城したが、翌 8 (1603) 年には内陸の神明山に新しく城を築くことにしている。翌 9 (1604) 年にはこれを久保田城として居城を移し、湊城は破却された²⁾。

湊城を廃棄して他所へ居城を移そうとしたのは、家臣達を収容するには城地が狭小で湊城が要害ではなかったからだという理由が通説となっている³⁾。

また、神明山は現在の秋田市千秋公園のことであり秋田の中央に位置する。この山は古い地質時代に東にある手形山から旭川の浸食によって切断された独立大地で、標高 45 m、35 m、25 m の三段の段丘からなっている。そのため秋田全体を見渡すことができた⁴⁾。

神明山に城を築いた理由については具体的には定かではないが、神明山の周辺地形をみてみると三つの理由が考えられる。

一つ目の理由としては神明山周辺が要害であったことが挙げられる。神明山の東部には南北に断続する広大な沼沢地が広がっており、その最大のものが長沼であった。長沼

は神明山の山裾から向かいの富士山にいたる広大なものであり、東部一帯は人の通行を遮断していた。さらに城下外側には南に楢山 (金照寺山)、富士山、北に手形山、泉山、西に寺内山、勝平山が点在していた⁴⁾。

二つ目の理由は水運を利用した交易上の利点があったことが挙げられる。久保田城下には旭川が流れていた。この旭川は城下を貫流して雄物川と合流し日本海に至る。そして雄物川と日本海の合流地点には土崎湊が位置していた。

そして最後の理由としては、神明山の麓が広い平野で、新しい都市計画を行うには最適の土地だったという理由が挙げられる。神明山の麓、現在の秋田駅周辺は長野と呼ばれていた。この地は高燥の地で、築城以前は川尻村の一部であったようである。築城後は上級家臣の屋敷町 (内町) となった。この起伏した平原は城下町を形成するのに十分な広さをもっており、城下町の中心部をなした⁴⁾。

これら三つの理由から、軍事的要素に加えて新たな都市計画を行うことを見据えて城地の選定が行われたのではないかと考えられる。

4. 久保田城下町の構造と機能

江戸初期から江戸末期にかけては「元和一国一城令」とこれに続く「武家諸法度」により、城は公儀の管轄下となった。また「大名家格制」が確立して、国持、城持、准城持、無城主格と城郭が持てるか否か等の身分上の区別が確立し、幕藩体制下の城郭管理が行われた。

一般的に近世において、城は山城から平山城・平城へと変化し、城下町は城を中心として、その周りに有力家臣団の武家屋敷が身分に応じて同心円上に配されて武家屋敷を構成し、足軽、徒士などの下級武士団の組屋敷や町人地はさらに外側に置かれた。寺社地は通常寺町の形態をとり、城下の縁辺部に線状に並べられた。

また、歴史地理学の分野では、城下町の最外部の外堀がどのような位置にくるかによって城下町をいくつかの種類としており、①城全体を惣構えで取り囲むタイプ、②上級の武家屋敷と有力町人地区を郭内におさめ、それ以外の組屋敷や一般町人地を郭外に追い出すタイプ、③郭内が武家屋敷のみからなるタイプが存在し、近世では②と③のタイプが多くみられた^{5) 6) 7)}。

久保田城下町の場合、③のタイプに近いものと考えられ、久保田城下町においても軍事的、経済的の両面から都市計画が行われた。城下町は大きく城、侍町、町人町、寺町に分けられるが、久保田城下町では侍町と町人町の完全分離が行われていた。城には石垣や天守閣が無く、城自体の防御は手薄であるが、周囲の地形や、城に侍町を隣接させ、寺町を置くことで、城下町全体で防御の役割を持っていた。

また、城下町内に商工業地である外町が存在し、経済の中心地としての役割をもっていた。城下町の建設は大きく

三期に分けられて行われていると考えられ、寛永7(1630)年頃までに主要な地区の整備は完了している。また、都市基盤の整備は幾度にわたって行われ、そこには為政者の関心があった。また、災害を契機に都市構造が見直されていた。以下、個別に詳細を述べる。

(1) 久保田城下町の構成

図-2に久保田城下町の構成図を示す。

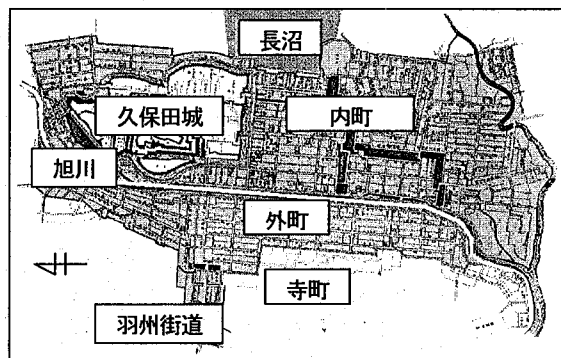


図-2 久保田城下町構成図⁹⁾

前述したように、久保田城下全体の東側には手形山、泉山、富士山、檜山や広大な沼沢地が広がっており、久保田城下町は基本的にはこの東側を背にするように展開する。

城下町は武家町と町人町から成り立ち、図-2に示すように旭川を境に東側を内町(=武家町)、西側を外町(=町人町)、その外縁部を寺町としていた。

以下に城と各町の説明をする。

a) 久保田城

図-3に久保田城構成図を示す。

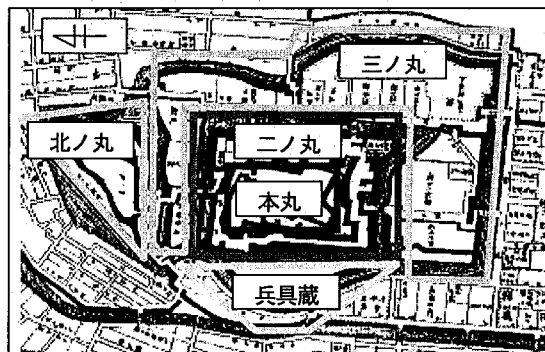


図-3 久保田城構成図⁹⁾

久保田城築城以前は、旭川が神明山の北端にぶつかっていくつかに分かれ、その本流は神明山の西端直下を流れており、居城の崩れをさけるために旭川を西に掘替えることが、築城にあたっての前提条件だった。そして、築城にあたっては、その旧川路を城の堀として最大限に利用した。久保田城は複数の廓を備えた平山城で、石垣がほとんどなく、天守閣がはじめてからつくられないという特徴をもって

いた¹⁰⁾。

久保田城は城の頂上に本丸を置き、その東側に二ノ丸を配した。本丸の北、東、南の三方を囲む形に三ノ丸が設けられた。本丸の西には堀を隔てて兵具蔵が設けられた。本丸には本丸御殿があり、藩主の居所と政庁の役割を果たした。二ノ丸には勘定所、役所、厩が置かれ、三ノ丸には藩の重臣の屋敷が置かれていた^{11), 12)}。

b) 内町

図-4に内町構成図を示す。

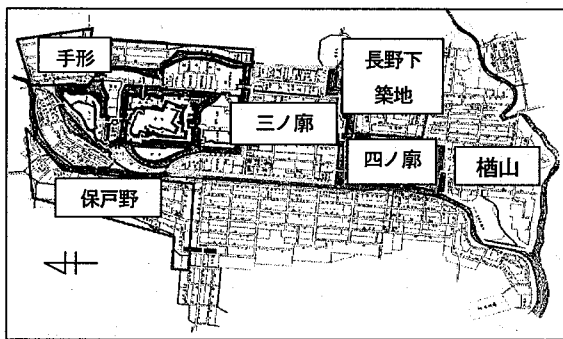


図-4 内町構成図⁹⁾

内町は侍の住む町だった。久保田城の南側に堀りを隔てて三ノ廓、さらに南側に堀りを隔てて四ノ廓と呼ばれる武家屋敷が広がっており、ここには中級以上の家臣の屋敷が配置された。また、城の北東側には手形、北西には保戸野、三ノ廓、四ノ廓以南には檜山、長野下、築地と呼ばれる地区があり、これらの地区には、足軽などの住む屋敷が置かれた⁹⁾。

これらの城を囲む武家町全体は戦時において城郭の一部としての役割を果たすように位置づけられていたことから外廓とも呼ばれていた¹⁰⁾。

c) 外町

図-5に外町構成図を示す。

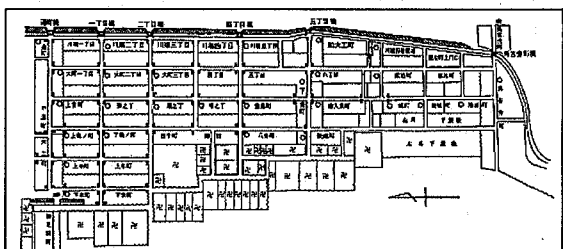


図-5 外町構成図¹³⁾

外町は町人の住む町だった。外町は旭川に接する西側に置かれ、家の列が表通りの両側に向き合っていた。また、寛文3(1663)年に作製された「外町屋敷間数絵図」によると、屋敷の間口は4間を1軒前とし、奥行きは大町で25間、その他では20間とされていた¹⁴⁾。

外町の中は久保田を江戸や土崎湊、能代、大館、弘前へとつなぐ羽州街道が貫通していた。羽州街道が川口から城

下に入った馬口労町通りと、久保田城から土崎湊へと通じる街道筋に設置された大工町、通町の通りとの間には、南北に走る川端筋、大町筋、茶町筋、亀ノ町筋の表通りをつくり、表通りに直交する9本におよぶ横道をつくって、外町の街路を基盤目状に設定した。これらの外町の路は、延宝2(1674)年と享保15(1730)年に路幅が表路5間以上、横路3間以上に拡張されるまでは、軍事的配慮によって狭いものであった¹⁰⁾。

また、藩は一定の区域における特定商品の独占的販売権、製造権を外町のいくつかの丁に与えて外町を保護し、城下内における物資の確保と統制を行った。これは、藩が丁に与えた権利であり、永く受け継がれるものとして家督と呼ばれた。この利権を与えられた丁を家督町、その扱い商品を家督物といった。例として大町では慶長年間(1595～1614年)から絹、麻、木綿、白糸、麻糸、古手類、小間物を城下町内で独占的に販売する権利を与えられた¹⁵⁾。

d) 寺町

外町の西側には、南北に外町を包み込むように40余りの寺院が配置されて寺町が形成された。これは外的防御のための設置であった。久保田城下町と土崎湊を結ぶ街道は城下の出入り口の部分で両側を足軽屋敷に挟まれ、その南側は寺町に接し、北側も三つの寺院を並べ、路には防御のための簡単な枡形を置き、土塁と水濠を設けて城下出入り口の固めとしている。寺町は佐竹氏が転封されたときに常陸から追従した寺や、土崎湊周辺から移転したものが多い¹⁴⁾。

e) 城下町の構成に関するまとめ

以上の内容から久保田城下町は、他の城下町と同じように、城自体の防御は手薄であるが周囲の地形と内町を利用した防御を意識したつくりとなっていることがわかる。また、城下町に商工業地である外町が存在し経済中心地としての機能を持ち合わせていた。これらの内容から久保田城下の構成は軍事的条件だけでなく経済的条件も大きく考えた構成だったと考えられる。

(2) 城下町の形成過程

次に久保田城下町の形成過程について考察する。

渡辺景一氏の書いた「図説久保田城下町の歴史」によると久保田城下の町割は表-1のように三期にわたり実施されたとしている¹⁶⁾。

表-1 久保田城下町の拡張の概要

	年代	整備の内容
第1期	慶長8年(1603年)	久保田城築城、旭川の付替、重臣の町割
第2期	元和6、7年頃(1620年頃)	内町、外町の本格的整備
第3期	寛永6、7年頃(1629年頃)	橋山、保戸野、手形への下級武士屋敷の造成

しかしこの内容だけでは、具体的に各丁の整備された時期がわからず、どのように城下町が拡張されたかについては定かではなかった。そこで、上述の内容を参考に、各丁

がどの時期に成立したか文献調査を行った。しかし調査を行ってみると具体的な整備時期の記述はほとんどみられなかった。そこで本研究では「梅津政景日記」等の文献に丁名が初めて登場したときを丁が成立したものとしてみなし、どのように城下が形成されていったかを考察した^{17)、18)、19)、20)}。

その結果、城下町は図-6に示すように、3期にわたって整備され、それ以降は少しずつ外に拡張されていた。城下の主要な地区の整備は寛永7(1630)年頃にはほぼ完了していたことがわかる。

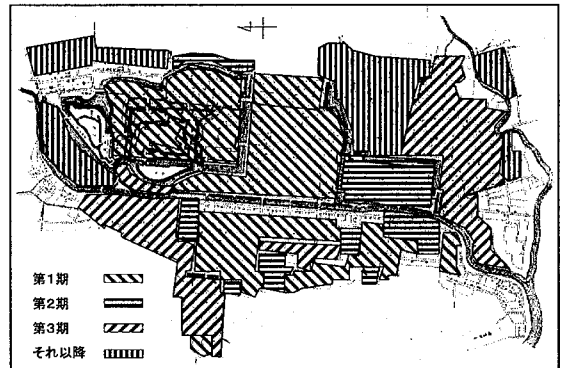


図-6 久保田城下町形成図⁹⁾

(3) 城下町の基盤整備

都市基盤の整備は幾度かにわたって行われていた。表-2にその概要を示す。

表-2 都市の基盤づくりの概要

西暦	和暦	概要
1619	元和5年	・藩主が上、中級家臣に久保田への集住を命じ、それに伴い町割り直すため、久保田における家作りを禁じた ¹⁷⁾
1620	元和6年	・藩主が田町、根小屋町が歪曲しているとして御町割直しを命じた ¹⁷⁾ ・藩主が長野下より堀川土手までの五丁を割直しを命じた ¹⁷⁾
1629	寛永6年	・藩主が大町と馬口労町が直結するように道路割直しを命じた ¹⁷⁾ ・藩主が通町と大町三丁の家並みを二階建てにするように命じた ¹⁷⁾
1663	寛文3年	・この年に作成された「外町屋敷間数絵図」によると屋敷の間口は4間を1軒前とし、奥行きは大町で25間、他は20間とされていた ¹⁴⁾
1674	延宝2年	・大火が発生。復興の際に道路幅を狭通りは5間、横小路は3間にする ²¹⁾
1730	享保15年	・大火が発生。復興の際に小羽甚きの屋根を禁止して萱葺きの屋根につくりを強制した ^{19)、21)、22)} ・同年、城下各丁で道幅の拡張が行われた ²¹⁾

元和6(1620)年、藩主佐竹義宣は久保田城から見ると、外町の中で連続している田町、根小屋町が歪曲しているとして「御町割直し」を命じた¹³⁾。同年にやはり久保田城から見れば町に「ひずみ」があるとして、長野下より堀川土手までの五丁(土手谷地町、中谷地町、東根小屋町、西根小屋町、中長町)を割直しさせている¹⁷⁾。

寛永6(1629)年には大町と馬口労町が直結するよう改修せよと当時藩主であった佐竹義宣が当時家老であった梅津政景に命じている。同年に通町と大町三丁(大工町、上通町、中通町)は家並みを二階建てとするように、義宣より指示が出されている。また各橋場の左右の家が見苦しいので、これも家を作り直すよう命じている。大町は最も早く湊町から久保田城下町へ転居し、中心的な役割を帯びた町であったこと、通町は羽州街道沿いに面していたため他

国の人々の目に触れることが多かったためにその景観を整えようとしたと考えられる¹⁷⁾。

そして寛文3年(1663)作製の『外町屋敷間数絵図』によると、屋敷の間口は4間を1軒前とし、奥行きは大大で25間、他は20間と決められていたことがわかる¹⁴⁾。

まちのつくりは災害にも影響された。久保田城下町建設にあたって外町の道幅は軍事的配慮から狭くつくられたという。しかし、延宝2(1674)年大火の復興では火災に際しての被害を少なくするために道路を拡張し、表通りの幅を5間、横小路の幅を3間とすることになっている。また、享保15(1730)年大火の復興では小羽板が不足したことから、もとは町屋の屋根は小羽葺きに強制していたものを、小羽葺きの屋根を禁止して茅葺きの屋根を強制し、再び城下各丁で道幅の拡張が行われている^{18)、21)、22)}。

このようにまちの美観や防災の観点からまちづくりが見直されていたことがわかる。

5. 近世秋田の都市の機能と配置

近世秋田では城下町を中心として周辺の都市、農村と陸運、水運の両方を用いて連結させることで、ものの流れを意識した交通が行われていた。

近世秋田の主な交通手段として陸運では羽州街道、水運では旭川、雄物川が利用された。羽州街道は福島、山形、秋田、青森と続く日本海側の基幹道路であった。羽州街道沿いには宿場町が設置されていたが、秋田藩の場合は宿場町での屋敷所持者の屋敷の大きさによって伝馬役と呼ばれる荷物輸送の実務を担当する制度があった。旭川は城下町の中を貫流し、雄物川と合流し日本海に至る。日本海側からの物資は土崎湊を経由して、また秋田郡内からの物資は直接雄物川から旭川に数多くある船着き場に届けられた。

また、城下町の周辺の都市として土崎湊、八橋村、川尻村がある。土崎湊は藩の海の玄関として、八橋村は信仰や娯楽の地として、川尻村は藩の重要施設の要衝としてそれぞれ異なった役割を持ち、また、交通の結節点でもあった。

そして周辺の農村はこれら交通幹線と結節点を通じて、城下町の市などに外向いていた。以下、個別に詳細を述べる。

(1) 交通

江戸時代の主な戸通手段として、徒歩や馬を利用した陸運と、船を利用した水運が挙げられる。久保田城下の場合、羽州街道と旭川、雄物川が主に利用された。

以下では、近世秋田における陸運と水運について述べる。

a) 陸運

羽州街道は福島桑折を起点として山形新庄を経て秋田領内を貫通し、青森に入る基幹道路であった。久保田城下町では外町を通り抜け、八橋村、土崎湊へと至っている。こ

の街道を通行する大名は、津軽、佐竹の両氏が主であったため、江戸を中心とした五街道に比べ整備、繁栄はしていなかった。また、秋田藩の交通は羽州街道を大動脈としていたが、さらに領内外の交通のために羽州街道を基幹とした脇街道も造られていた²³⁾。

街道沿いには宿場町が設置されていた。宿場町は街道の両側に同じ奥行きで表間口も同一に規格された短冊屋敷が連続して並ぶ両側町を基本型とした。秋田藩の場合、奥行きが20間ないし25間、表間口は4間の例が多い。そして表間口4間を基準とし、その屋敷所持者に一軒分の伝馬役が課せられた。伝馬役は、公用や私用、商用の通行者や物資の通行に際して、上り下りとも、隣の宿場町まで人馬を提供して荷物輸送の実務を担当する仕事の制度のことである。この伝馬役には賃金が公的に決められていた^{10)、15)、24)、25)}。

これらの内容から羽州街道は秋田領内唯一の基幹道路で陸運の要であったと考えられる。また、羽州街道の通っていない部分には脇街道が整備され、羽州街道を要とした交通網が形成されていたと考えられる。そして、陸運の結節点として宿場町が存在し、この宿場町間をつなぐ、公共交通的なサービスとして伝馬役が存在していたと考えられる。

b) 水運

旭川は城下町を貫流し、雄物川と合流、そして日本海に至る。

旭川には多くの船着き場が存在した。特に外町の旭川沿岸部は「浜」と称される荷揚げ場であり、浜には舟運によってもたらされる年貢米、商米をはじめとする諸物資を保管する「浜小屋」が多く建てられた¹⁰⁾。表-3に主な船着き場の概要を示す。

表-3 旭川の船着き場の概要

地名	概要
川尻港	・雄物川と旭川の分岐点に位置する ²⁶⁾ ・新川の渡しと呼ばれる渡船場があった ²⁷⁾
牛島港	・太平川、雄物川を利用して古くから土崎湊と往来があった ²⁸⁾ ・肴や上方の物資が運ばれ、近在の村々に別れてきた ¹⁸⁾
五丁目蔵船着き場	・米や大豆、小豆が、河辺と仙北から運ばれてきた ²⁵⁾ ・土崎湊から日用雑貨、海産物が運ばれてきた ^{18)、29)}
一丁目川端船着き場	・土崎湊から日用雑貨、海産物が運ばれてきた ²⁵⁾ ・旭川を通る運送船の終航地だった ¹⁸⁾

江戸時代を通じて地域を問わず、全国どこにでも流通した最大の商品が米だった。この時代、米を例年遠隔地に繰り返し搬送するために水上輸送の方法が整備された¹⁰⁾。

当時、雄物川筋の川湊は舟場と呼ばれていた。雄物川は横手盆地の西部、出羽丘陵の東の麓を北流するため、川湊の多くは穀倉地帯を背後に控えた雄物川の東岸に開けていた。佐竹氏は平鹿、仙北地域から雄勝郡に至る秋田藩の穀倉地帯と久保田、土崎湊を直結した。舟場には穀倉地帯より送られてくる米穀を一時保管するための倉庫が営まれていた¹⁰⁾。

雄物川水運の特徴として、上流域の川湊と河口の土崎湊を結ぶ船場直行便がある。日本の多くの河川では長大な河川に川船を就航させたため、上流域の小舟から、下流域の

大型船に荷物を積み替える継船制を採用することが多かった。しかし、雄物川水運の場合はここで必ず積み替えを行うというシステムをとっておらず、小舟で土崎湊と船場を行き来していた¹⁰⁾。

船では表-4のようなものが運ばれており、出荷地によって三つに分類されていた²⁹⁾。

表-4 舟運によって運ばれていた品物

秋田藩領以外の産物が秋田にもたらされる商品 糸、半紙、打海苔、切竹、青竹、簾節
他領からも移入されるし、内陸部からも積み下される商品 茶、からし、薬種、柿、硯
純粋な秋田藩領の産物商品 屏風、空樽、草苧、草履、下駄、酢、醤油

以上の内容から、旭川には数多くの船着き場があり、人や物を運ぶ重要な手段となっており、旭川の船着き場には特に土崎湊からの諸物資を運ぶことに利用されていたと考えられる。また、雄物川の水運は土崎湊を中心として独自のシステムを構築していたと考えられる。雄物川で運ばれていた物の特徴として、米の廻漕を第一として、一部の特産品輸送と圧倒的多数を占めた生活必需品の廻漕が考えられる。

c) 交通に関するまとめ

これら交通の内容から、近世秋田は羽州街道、旭川・雄物川という二大交通幹線によって交通が成り立っていたことがわかる。また、この二大交通幹線の利用を意識して、人や物の流れがなされていたと考えられる。

(2) 久保田城下町周辺の都市の機能

前述した羽州街道、雄物川、旭川といった交通幹線と城下町を結んだ都市として、土崎湊、八橋村、川尻村があった。図-7に近世秋田の都市の配置図を示す。

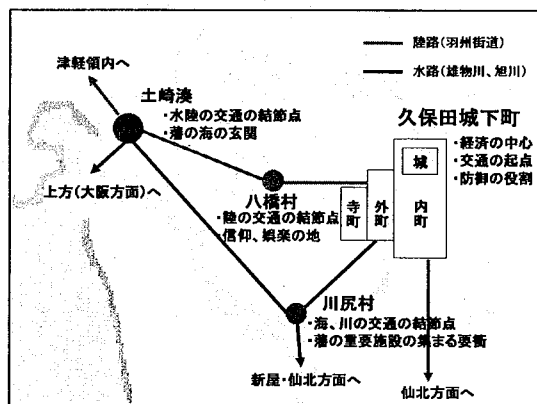


図-7 近世秋田の都市の配置

a) 土崎湊

前述したとおり、徳川家康により秋田へ転封を命ぜられた佐竹義宣が最初に入城したのが土崎の湊城であった。

佐竹氏入部以前の秋田は、土崎湊を安東氏、仙北は小野寺氏、由利では仁賀保氏などが治めており、一国内でのような流通が行われていたとは考えにくい。しかし、佐竹氏

が秋田へ入部し、領内一部南岸を除き雄物川流域全体が佐竹領となり、久保田城下町が建設され、街道を整備したことで、流通のネットワークが広がったことは確かである。そのため、土崎湊は湊町の規模が大きだけでなく、背後に城下町久保田の消費人口をかかえ、雄物川の水運を通じて、仙北、平鹿、雄勝三郡につながっていたから広大な商圏を形成していた。移出の中心は米穀で、木綿、古手の大衆衣料品から、塩、茶、煙草、酒、紙、小間物類に至るまで、多種多様な商品が移入され、領内に売りさばかれていた³⁰⁾。

当時、雄物川は湊町の西北方面に広がる砂丘地帯にくいこむように湾流し、河口を西に向け、中間に広大な中州を形づくっていた。廻船が湊に着岸することはなく、中州の西側に投錨し、荷の積み卸しには導船と呼ばれた舁下船を利用した。一方、雄物川を下ってきた川船も中州までは至らず、手前の当方右岸に着岸して船揚げしたことからここに蔵町が形成された³⁰⁾。

また、土崎湊は宿場町でもあり、寛文元(1661)年に駅馬役所が設けられた。10町で伝馬96匹を負担するかわりに、それまで城下町久保田に独占されていた木綿、古手、絹布、小間物類の湊町での販売が許可されている³⁰⁾。

これらの内容から土崎湊は港湾施設が整い、久保田の海の玄関となっていたことがわかる。それに加えて羽州街道の陸路が合流して流通の中心地になっていたことがわかる。また、これらのことから水運と陸運を結ぶ交通の結節点であったと考えられる。

b) 八橋村

八橋村は羽州街道筋に沿って久保田城下町と土崎湊の中間に位置していた。元和元(1615)年に日吉神社が南秋田郡笹岡から八橋に遷され、久保田城下の商家、外町の鎮守の宮として環境が整えられた。その後多くの寺社が置かれ、沿道には茶屋が軒を連ね、それに加えて弘前藩主津軽氏の参勤交代路でもあったことから人の往来も多かった³⁰⁾。宝暦4(1754)年の八橋には芝居小屋があり、日吉八幡神社や古四王神社に多くの参詣人が集まり、「五郎兵衛茶屋」「重助茶屋」などの茶屋に立ち寄ったために賑わった。また、この地は風光明媚で佳趣に富み、士人文人の遊楽地としても発展した^{32)、33)}。

これらの内容から、八橋村は多くの寺社や茶屋があったため参詣や遊覧で賑わい、遊楽地の役割を持っていたことがわかる。また、羽州街道に沿い、久保田城下町と土崎湊の中間に位置していたことから、陸の交通の結節点の役割を持っていたと考えられる。

c) 川尻村

慶長7(1602)年、川尻村は毘沙門、上野、川尻の三ヵ村に分かれていたが、元禄3(1690)年に合併して川尻村となり、秋田郡に属した³⁴⁾。

川尻地区は軍事、経済上重要な地域で、新屋と川尻を結

ぶ新川の渡しには川口関所が置かれ、足輕屋敷もあった。川尻には銭鋳場や鉄砲所や藩主の御休所、葉草園、雄勝・平鹿・仙北三郡の川下げ物資を収納する石倉や、三郡から下げられる木材、薪炭、萱の浜などがあり重要な地点であった。また、旭川と太平川、雄物川の合流地点で河港としても土崎湊に次ぐ重要な位置を占めていた²⁰⁾。

これらの内容から、川尻村は、藩の重要施設の集まる要衝であったことがわかる。また、雄物川と旭川の合流地点に位置し、港であったために水運の結節点であったと考えられた。

d) 久保田城下町周辺の都市の機能に関するまとめ

これらの内容から土崎湊、八橋村、川尻村は交通の結節点であったことがわかる。また、異なる都市機能を持っていることがいえ、都市機能の分散がされていたことがわかる。

(3) 周辺農村との関係

外町で行われていた朝市の事例から、城下町と周辺農村との関係について説明する。

久保田城下町は領内の一大消費地だったために、領内各地から農産物、水産物などが送り込まれていた。なかでも上通町、中通町、大工町は、久保田城下と農村部を結ぶ街道筋に位置する丁であり、かつ城下を通る羽州街道に沿って成立した丁であったことから、早くから常市として朝市がたてられていた¹⁰⁾。

寛延7(1795)年8月の「町触」では「四ツ小屋村、仁井田村等の農民が大根商いのため毎朝通町へ通うのに本道を通らず、亀ノ町虎口より内町を通り抜けている者がいるので、これを差し止める」という触れが出されるほど、久保田周辺の村々から野菜などを売りに来る農民が多かった。また、寛延2(1749)年の書き付けによれば、近在の農民にとってこの市は青物、薪、紫檀、などの諸物資を金銭に換える場所であり、秋の貢祖上納の際に収納不足分を立て替えてもらって領主に納め、翌年に青物、薪、紫檀などの諸物資をこの市で売却して借りた金を支払うことが行われていたことが書かれている²⁰⁾。

これらの内容から、城下町には周辺農村から農民が市にやってきていたことがわかり、市を通して商人と農民との接触は深く、市が村と町を結ぶ交易の場になっていたと考えられる。

6. 近世秋田の人々のまちづくりへの関与

まちづくりにはそこに住む人々の生活が大きく関わっていた。また日常と非日常では生活の形態が異なり、それだけがまちづくりに影響を及ぼしていた。

日常の生活では、町民は橋、町門、水汲み場など城下町の諸施設の維持を行い、町役を負担する労働力であった。

また、感恩講と呼ばれる町民の設立した基金が存在し、町民同士が助け合っていた。

近世では世の中の変化も乏しく、人口の大多数を占めていた町民、農民には毎日が同じことの繰り返しであったため非日常が求められ、それは祭りや遊里であった。祭りは元来神事として行われていたが、次第に見物し楽しむ祭礼の性質を帯び娯楽として発達した。また藩の取り締まりによって遊里は土崎、八橋など城下町から離れた場所にしか許可されていなかったが、次第に城下町の中に遊里が許可されるに至った。その祭りや芝居がまちの形成に影響を及ぼした。以下、個別に詳細を述べる。

(1) 町民の日常

a) 外町各丁における諸施設の維持

町民は城下町の都市機能を維持し、町役を負担する労働力だった。外町の各丁は独立した丁財政を持って運営されており、外町における諸施設は各丁によって維持されていた¹⁾。表-5に事例を示す。

表-5 外町諸施設の維持の事例

施設	概要
高礼場	・高礼場は法度、御触を公示する場所である ²¹⁾ ・移動、建て直しの際には大町三丁と惣町(総町)が半分ずつ負担した ¹⁹⁾
橋	・旭川の橋の普請、修繕は町奉行の管轄に置かれた ²¹⁾ ・普請、修繕の経費や人足はいくつかの丁で負担した ²¹⁾
町門	・表通りの隣丁へ通じる上下出入口には町門が建てられていた ²¹⁾ ・町門の建て直し、修繕は丁の費用で行われた ²¹⁾
水汲み場	・外町では旭川の水を飲用水としていたため川端には水汲み場が設けられていた ²¹⁾ ・利用する丁で共同して組を作って管理していた ²¹⁾
その他	・丁内の道普請は丁ごとに行われていた ¹⁹⁾ ・丁境には水路があり、小橋が架かっていたが、維持は小橋に關わる各丁が共同で行っていた ¹⁹⁾

高礼場は法度、御触を公示する場所である。もとは大町二丁目にあったが、寛文12(1672)年に馬口旁町が馬宿とされたことに伴って馬口旁町へ移されたが、その移動、建て直しの費用は大町三丁が負担した^{19)、20)}。

また旭川の橋の普請(工事)、修繕は町奉行の管轄の下におかれ、普請、修繕の人足はいくつかの丁が負担していた。例えば、六丁目橋は上鍛冶町と本町六丁目の二丁が負担していた²⁰⁾。

この他にも丁内の道普請は各丁が行っていたし、各丁の丁境には水路があり、小橋が架けられていたが、その維持は小橋に関わる各丁が共同で行っていた¹⁹⁾。

これらの内容から、丁ごと、または丁が集まって城下町の施設の維持が行われていることがわかり、そこに住む人々の手によってまちが支えられていたことがわかる。

b) 感恩講(かんのんこう)

感恩講とは町人が設立した困窮人救済のための基金のことである。感恩講の内容は、出金者を募り上納し、それをもとに知行地を買い入れ、そこから上がる米銀をもって窮民の救済に充てるというものであった。感恩講による救済事業は文政12(1829)年から始まった³⁰⁾。

天保3(1831)年12月に書かれた施工人別覚には天保

元年から同3年までに困窮人の救済に用いた白米、銭の量と救済した延べ人数を記載している。それによると、総人数 45482 人、総白米量 136 石 4 斗 4 升 6 合、総銭 51 貫 749 文であった³⁵⁾。

この内容から、町民が自主的に集まって行動を起こしていたことがわかる。また、町民が町民を救うという住民同士の助け合いがあったことがわかる。

(2) 町民の非日常

a) 祭り

漁業、農業などは自然に関わりが深く、飢饉や地震などの天災の影響を大きく受けるため、人々は信仰心が強く、寺社が数多くあった。そして元来、神事として祭りであったものが次第に見物し楽しむ祭礼の性質をおび、娯楽として発達していった。表-6 に近世秋田で行われた主な祭りを示す。

表-6 近世秋田の祭りの事例

行事名	開催地	特徴
歳神祭	久保田城下	・道祖神を祀る神事であり、全国各地で行われた ・久保田藩では、鳥追い、かまくら、火祭りと結びつき城下を賑わした ^{18), 36)}
鹿島祭り	久保田城下 川尻	・作神、除災の神である鹿島神を祀る神事であった ・船や人形を川や海に流した。地震、飢饉等の災害後に行われることもあった ^{18), 37)}
土崎神明祭り	土崎	・神明社は奥の総鎮守で、祭りは神事であった ・外港としての性質上、他藩の人々も参加し、祭礼として賑わった ^{33), 37)}
眠流し	久保田城下 土崎	・元来、睡魔を流す行事であった ・盆踊り、セタと結びつき祭りとして賑わった。芋燈の根拠であると言われる ^{18), 33), 38)}
日吉八幡祭	八橋	・元は領内の守護神として佐竹氏が祀る ・外町総鎮守の祭礼として山車、屋台等で賑わい、藩最大の祭りとなる ¹⁹⁾

これらの内容から、土崎神明祭は土崎で行われたために、また、日吉八幡祭は八橋で行われたために、それぞれの地域の発展の一因となったと考えられる。

b) 記述からみる人々の暮らし

人々の暮らしを知るうえで、興味深い記事があるので引用する。

「…末の八日向馬喰労町の不動尊へ参詣ながら、暑さゆへ川岸より小船に打乗りこぎ出させ、程なく川口も越ひ…つち土崎の浜へ打上り、瓢瓢干軒湊の遊女町へと心ざす所、先御利昌の有神有神と上気を直すむねの内其断、大神宮産宮、其通り住吉大神を拝し奉る。…買物方々尊者二三人連にて、花の久保田天下幕下町へ、…戻足は鍛冶町より出曲り、戸嶋町の料理屋茶店、扇の丁は出じめ方、…なまくさ町を横めにて、壱丁目小路かめの丁子屋杯のにほひ臭ン、なの葉の汁で御茶漬と鳥渡立寄り…

戯文「冷風丸道行草」(1808)、作者：久徒³⁹⁾

この記述の内容は、筆者が川尻方面から船で土崎湊へ行き寺社を巡りながら久保田へ行き、食事や買い物をするという紀行文である。人々にとって土崎湊や久保田城下への旅や寺社参詣は非日常的な行為で娯楽の一つであったと考えられる。

c) 遊里

18 世紀なかば、藩は土崎、八橋、川尻に芝居興行を許可した。しかし、城下での遊郭の営業は許可されず、城下町の大町、茶町、馬口労町では私娼を抱えていた³²⁾。

18 世紀後半になると城下の寺院等に雑芸能が横行し、外町の外に隣接していた下町(えた町)に芝居興行が許可された³²⁾。

そして幕末になると外町の中の米町に遊里が許可され、料理屋と遊郭が兼ねていた³²⁾。

以上のように、始めは城下町から遠ざけられていた娯楽が、時代が進むにつれて、町の中に存在するようになった。住民の非日常生活の中で展開された多様な娯楽が、都市形成に影響を及ぼしていたことがわかる。

7. まとめ

秋田の歴史に関する既存文献としては多数の文献が存在する。しかしながら、近世の秋田について都市形成や住民の関与など客観的な事実にとって整理したものは見られない。そこで、本研究では城下町の形成過程を図で示した点や、藩主が都市計画のコントロールを行っていたことなど整理することができた。以下にその詳細を示す。

(1) 久保田城下町の構造と機能について

佐竹義宣は都市を一から新しく創ることを見据えて土地選定を行っていた。城には石垣や天守閣が無く、城自体の防御は手薄であるが、周囲の地形や、城に侍町を隣接しておくことで、城下町全体が防御の役割を持っていた。また、城下町内に商業地である外町が存在し経済の中心地となっていた。また、藩主が町割りを命じるなどの都市計画のコントロールが行われていたことや、また、大火復興の事例から災害を契機に都市構造が見直されていたこともわかった。

以上の内容から久保田城下町は軍事的条件だけでなく経済的条件も考慮し、コントロールされた都市計画が行われていた。

(2) 近世秋田の都市の機能と配置について

近世の秋田は羽州街道、雄物川・旭川という二大交通幹線によって交通が成り立っていた。羽州街道、雄物川・旭川周辺に沿っていくつもの村が存在したが、その中でも土崎湊、八橋村、川尻村は交通の結節点となっていた。また、それぞれの町や村は異なった機能を持っていた。そのため自然と都市機能の分散がなされていた。また、城下町の外町で市が開かれていたため、城下町で物の売買が行われ、外町が流通の中心地となっていたことがわかる。

以上の内容から城下町を中心地として、羽州街道や雄物川・旭川を利用しての周辺の町、村との交流を促すような

配置ができあがっていったと思われる。

(3) 近世秋田のまちづくりへの人々の関与

橋や町門など外町の諸施設の維持は各丁によって行われていたおり、また、感恩講と呼ばれる町人の設立した基金があったことがわかった。そして、祭りや遊里など町人の非日常生活の中で展開された多様な娯楽が、都市形成に影響を及ぼしていた。

これらの内容から町民がまちへ深い関わりを持っていたことがわかり、人々の生活がまちの形態に大きく影響を及ぼしていたものと考えられる。

以上のように近世秋田のまちづくりにおいては、計画的に都市の骨格が形成され、これを基盤として、藩による町並みの誘導や結節点が形成され、そしてそこでの人々の営為を経て今日に至っているものと考えられる。

参考文献

- 1) 「国典類抄 前編軍部一」1811～1816.
- 2) 「羽陰史略」 出版年不詳.
- 3) 岡見知見：「柞山峯之嵐」 出版年不詳.
- 4) 渡辺景一：「久保田城ものがたり」 無明舎出版、1989.
- 5) 新谷洋二：「日本の城と城下町」 同成社、1991.
- 6) 矢守和彦：「城下町の形」 筑摩書房、1988.
- 7) 西ヶ谷恭弘：「日本史小百科 城郭」 東京堂出版、1988.
- 8) 中田勝康、城下町の比較と街づくりとの関連性、土木史研究 第12号、1992、pp333～340.
- 9) 秋田沿革史大成附録、「秋田城廓市内全図」1896に修正加筆.
- 10) 秋田市：「秋田市史 近世通史編」 秋田市、2003.

- 11) 「城下絵図」1759.
- 12) 「国典類抄 後編賓部 覚書」 1811～1819.
- 13) 秋田県史第二巻近世編上、1977「久保田外町町割図」を引用.
- 14) 「外町屋敷間敷絵図」1633.
- 15) 「新秋田叢書 十四 大町三丁目記録永代帳」1972.
- 16) 渡辺景一：「図説久保田城下町の歴史」 無明舎出版、1983.
- 17) 「大日本古記録 梅津政景日記」1966.
- 18) 「第二期 新秋田叢書 三 上肴町記録」1931.
- 19) 「米沢町記録」 出版年不詳.
- 20) 「羽生家文書」 出版年不詳.
- 21) 秋田市：「秋田市史 近世資料編」 秋田市、1999.
- 22) 秋田姓氏家系研究会編「久保田町記録集・川口町丁代文書」、1987.
- 23) 「領内大小道程帳」1615.
- 24) 「黒印御定書」1605.
- 25) 「駄賃制札控」1671.
- 26) 佐藤清一郎：「雄物川往来史(下) シリーズ秋田の民衆史4」 秋田文化出版、1979.
- 27) 「新秋田叢書 伊豆園茶話」1971.
- 28) 橋本宗彦編「秋田沿革史大成」 加賀屋書店、1973.
- 29) 「新屋村肝煎文書 新川入御役銭御取立覚」 出版年不詳.
- 30) 塩谷順耳他著：「秋田県の歴史 シリーズ<県史>5」 山川出版社、2001.
- 31) 今村義孝：「わが町の歴史・秋田」 文一総合出版、1981.
- 32) 佐藤清一郎：「秋田県遊里史」 無明舎出版、1983.
- 33) 津村涼庵：「雪の降道」 出版年不詳.
- 34) 飯塚喜市：「八橋・寺内・川尻・千秋公園道しるべ」1983.
- 35) 「近世社会福祉史料 秋田感恩講文書」 校倉書房 2000.
- 36) 「秋田叢書 秋田風俗問答状」1930.
- 37) 金森正也：「近世秋田の町人社会」 無明舎出版、1998.
- 38) 久徒：「冷風丸道行草」、1808.

近世秋田の都市構造とその形成過程に関する研究*

木村一裕**・清水浩志郎***・三浦大和****

近年、歴史的遺産や町並みに対する関心の高まりから、都市の歴史と文化の重要性が徐々に認識されるようになった。現在の都市のありようはこれまでの歴史の積み重ねによって形作られたものであり、今後のまちづくりを考える際にも都市の歴史を理解したうえで、継承し、展開することが重要であると考えられる。

本研究は、文献調査によって、近世秋田の都市の構造とその形成過程を歴史的な視点から把握することを目的とする。

研究の結果、秋田市は防衛、景観および経済活動の面からコントロールされ、計画的に形作られていた。また、経済、娯楽、まちづくりなどそこに住む人々の活動とともに都市の構造は徐々に変化していったことがわかった。

A Study on the Structure and Formation Process of Akita City in the Edo Era*

By Kazuhiro KIMURA**・Koushirou SHIMIZU***・Hirokazu MIURA****

For the inhabitants of the city, the importance of history and culture of the city has been recognized gradually. The purpose of this is to understand the city formation process of Akita from a historical aspect in the Edo Era by the method of document investigation. As a result, Akita City was made premeditatedly constructed and controlled from the aspects of defense, scenery and economic activities. Also the city structure has been changed gradually with the activities of inhabitants, such as economic, amusement, and community development activities.